



枇杷園七教集二編

5
4631
2



橋日記 文化五歌仙 於本音 玉篋
 花橋 始久居日記 落梅花

枇杷園七部集二編

尾陽 東隣堂藏

昭和十六年一月十一日 寄
 尼野貴英氏 贈



記

十五束の月を矢張の橋もよ
 梅のついでにの清福記ひめの回福に
 性てあはれあともあともあともあとも
 白居 桃生

權日記

たぐは秋子枝のあうさよ一四〇四
りやとよ秋もふ橋をさ

お細ぬ

秋をひきき移人よせ秋風
きけりよやたふみさく秋絲々
羅城 重厚

一切衆生妻有佛生

こころの湖まきんさの月一自樂

流ねおのちのうまをちかむ健 関奥

志つくりと水ま流つくまき 柳菫

白ぬや果いさむき塔の氣 白岡

根まあふれま何くを塔牛 全

枕七終二上二

たの雪やあはれとて あまき強鳥 竹有

塔への身ぶとま流しきものもほ 青霞

佛まあふれとあうぬきあつと 長參

むきあふれとあうぬきあつと 壺伯

空や上人あふれとあうぬきあつと 入来

よふ川ちかたわらきれもほま 月影

たふ山のうろのさとりきとて 雲霧

都四糸うはつは蘆道別思て 方明

修りよりこふ新住めつとあまき 方明

まきとよよとあつとあつとあつと 雲霧

なるとあつとあつとあつとあつと 紀風

枕七終二上二

おのひさるしまためもあはれは
 そひあふよそひきくふのちるしき
 宵も平とこめのあはれは
 木たるふをきくこひ出でた
 大樹寺とつふ西寺よあはれ
 ちりぬ又澄の山ちりあはれ
 ちり清浄の遊歩あはれ
 志別の庭よあはれ氷声をはき
 白雪の庭よあはれ林のちをよあ
 とりちりちりちりちりちりちり
 ちりちりちりちりちりちりちり

批七歌二上二

あはれはあはれあはれあはれあはれ
 月居のあはれあはれあはれあはれ
 雪帯のあはれあはれあはれあはれ
 湖をのあはれあはれあはれあはれ
 秋の風我むくあはれあはれ
 秋のあはれあはれあはれあはれ

士朗
 天老
 了因
 入素
 月居
 雲帯
 方明
 墨尚
 紀鳳

批七歌二上三

甲斐根

ぬきも葉よ茂る葉吹雪く山嶺
 光琳も松も似たり秋の月
 五月のや松のうぶく溪の萩
 我軒は雀啼きをり秋の葉
 さあけのうぶも葉の影を掃か
 若くはなまきり葉のまきぬきり
 口のまきよむりぬけたるまき
 其のまきのまきり葉を掃か
 竹のまき日
 けふまかり竹は若くは嶺を掃か

墨尚

一草

葉二

大魚

杉六

若丸

眠上

美智彦

岳格

批七款二上三

こころのうぶを掃かすの嶺

雄淵

本松一の足の嶺を伊吹山

子近

まきりや葉を掃かす山

子繩

しんのまきり葉を掃かす山

趙鳥

たもつと松のまきの秋の葉

卓池

秋の葉よあまひをこめてまき

き色女

はまきりなまきり葉の嶺

其成

副將軍藤平八郎忠度ハ織田の

縁のまきり葉の嶺を掃かす

うぶまきのまきり葉を掃かす

鞍をこめてまきり馬鞍鎧甲

弓矢をカよつてまてあはれ
てり輝く不とよゆたきこれハ

老つらうりうりうり物あり

おまふして木のつゆの夕ふか
位青

伝まのい彫るいのを付あがり
墨山

蠶うき世の人をえあるうか
于當

つらうり亀の宮お堀うか
素洲

年のうらむ日
樗堂

たぐ居るを年悟むう問れり
常棋

ひらうりまふさうねよるの足
素築

ひらうり待月日多あをゆる
素築

批七款二上四

結をうし秋もあらの榎うか
園更

淋しさをさるのたふ板戸か
蕉雨

ちち梅は催されけりまの風
卧央

海棠の花濡れぬ月あるとを
友国

際りのあふもさるう月か
棋價

菱中菱
高

ささきをれり枕よをい言羽山
士峯

まきの月あるとをふすよ出れ
成美

かまきつらうりあふも月あをい
亜溪

あまのまのあふまを白ふ梅か
其谷

えらうりまをいあふ梅か
可重

鳩の鳴り里のうぐく後嘆又なるし

魯隱

大平河眺望

くれ竹の葉より露より秋のり

素外

深草のたぐひるるるん二日の月

壽梵

降ゆきり雪はワくく物より

菊明

藤よあれハ大くこの霜を丁の露

如高

梅うきはるるくく露とハありぬ

杜石

十月一日石山寺よの秋

大阜

我よあの日冬を暮るるて何處迄

若人

松系をぬげり出とて冬雪山

大左

ちうつきのおうあて暮の朝やふ

大左

批七款二五

うぐく山見くためて朝を

大江

老練の角をふせとて一あらし

圃耒

丹波のまよ山居り

新文

世よあれ門くくあり

青阿

知の葉よとり枯く葉の枯

斗入

あさちあも世秋のゆきと物より

桂五

綺女房といつる山よ

少汝

冬よあも枯る日ハす

椿堂

うんこ冬ゆきも藤の一葉

龜年

靴よすもあもゆきと物より

都表

まさらまよとてくく

猿硯

夕見坂

月影や沖の河〜又暮子色
心算舟博明やさき夜をとも別り
空身やされと都の宵のそし
見きりやをせハ維子の福むけの縁り
終中よとをせよ〜のこくまをせよ
梧葉吹秋晩
さ〜むらろ 燈火ひく〜秋の夜
風よ身をまきまきをあら 旅 孫外
旅人ようりりきり
旅よ阿蘇山をまきまきをあら 卓池

魚日
騏道
無曲
五明
升六
啓甫
徐英
卓池

批七勢二上六

旅よ阿蘇山をまきまきをあら 月つんが

九月十六日の阿〜

月と日のおい〜ふは〜り不〜の
世をわけ〜ま〜ね〜鳴〜き〜
ふふとねハ程程也花すき

松兄
士朗
岳路
少女

九月十六日の阿〜

士朗

せぐれハ漁村の柳枝より
 小笠をさうふありの人歌
 月もあきらの出よ日のそと
 とけけあいたる中の暗い
 ぬきもあつくとあはぬ
 朝の西ハいつもあつる
 一宿もあつたふたつあつた
 ふうんえ 鞍をさうあつた
 石をよき山をさうけ
 死ぬる 時をぬのせんさうり

士朗 卓池 岱青 羅城 岳格 紀鳳 池 朗 城 青

批七歌二上七

されいもあつたふたつあつた
 戀をさうりよ月をさうり
 志る砂はさう入る砂をさうり
 志りさうりいさうりの秋
 我もあつたふたつあつた
 鏡のうらやまあつた
 秋風のふけはそ花の志はひたる
 舟をさうりいさうり
 定よ頃城の命もさうり
 皆うらやまあつた馬はさうり
 洲原の川はさうり

鳳 朗 池 青 城 絡 鳳 少 汝 方 明 池

藪へうけさる今の太 ぬ
 申しくはかきとく見ゆら感念に
 たまこの子孫を掃くはなはらし
 ねもふさば三葉の掃くも冬の味
 おもむくもくも 国子ふさし
 有りてはふさのわのわくも 鶏の音
 ぬくつをぬく 桐神の字をたき
 梅檀のま下ふさふさる串園子
 葉子のわくを掃く 葉くは
 夏のわのふさくも程おろく
 氷玉の山の月をさるる くれ

朗 青 皓 明 汝 朗 池 格 青 汝 明

批七款二上八

心種をよもをさめてハそまうけ
 とくちくのりおきこまのひく
 魚のこまとむくい隣のわんて
 まの年の日は四ツおまを 買入

池 朗 青 輅

- 士朗 六句 紀鳳 三句
- 卓池 六、 少女 三、
- 岱青 六、 方明 三、
- 羅城 三、
- 岳輅 六、

寛政十年 戊午秋九月

淡山を原日り安き梅の葉
かけ蝶衣ののちり物たり
磯らさきそのを海苔うと手ま
小秋のやとくろる人
いさよひのやととて形守
旅の多う新五所ノ
足をとて一歩も踏もう
あまの小さき雲ちり
袖のうらやまを捨て捨る瓜の皮

批七秋三九

淡山を原日り安き梅の葉

士朗

かけ蝶衣ののちり物たり

翁我

磯らさきそのを海苔うと手ま

外山

小秋のやとくろる人

月底

いさよひのやととて形守

沙鷗

旅の多う新五所ノ

士朗

足をとて一歩も踏もう

對我

あまの小さき雲ちり

升

袖のうらやまを捨て捨る瓜の皮

月底

八七五三

作の雲よぬまゝ 九

沙路

伊勢人らとくらのものもろく

士朗

獅子を舞舞ひひく中並に

若森

虫けつは月のまきひをりり

井石

砂のひやうく音くのそく

月夜

藤てりよよぬ毛か下の佛堂

沙路

是と花の末くれは様 十

六郎

吸まのハ先念魚は芥喜

若森

毛のつひあふ正持の猿

井石

川言のそれふ人のあつり

月夜

炬の火は焦す 菊 多れ

沙路

批七終二上十

とやうと文の席を并ひきて

本朗

撫子にうぬぬ撫子の

若森

一筆は連歌師二人そくちり

井石

桑浄瑠璃のもろけは

月夜

赤くく新室の香居の赤くと

沙路

細豆くぬ家とくハ

士朗

飛風呂の中ても月ハ招き

若森

花あゝ泣をまつテのま

井石

笠よきさる芒の露をさうり

月夜

赤きりくもあふ海士の

沙路

朝酒の樽をよひあ

士朗

卒粒波の小町のしづ竹を吹
松一本早もつき寄きいさのちんや
重殿のしづぬ花のきき山
物言雀大なるのちらつまき
まらかひをしづよしきさきさき

鳥系
升五
月夜
沙路
士郎

七句 士朗

七句 露我

七句 竹有

七句 月底

七句 沙路

批七款二上

春の月まきのまきまきぬ
竹雞をほくく山道の店
ありとありと木のきき桃櫻
月の平ほとの土をきき
能ら猫の世をききしり
あきしきあきの海ぬいた橋
祇の勝りめたる里うら
宇治のくすすきききき
意くしきききききき

士朗
竹有
岳路
兼野
露我
不精
月底
梅月
休月

批七款二上

傘張廣げくし市守をうしき
越級よ乃をくやううき人を
二十日の月の山際乃 無
松杉のうちの奥ある秋すき
竹のあらうおもはれきく
甚よまけくくふのきゆふの
あつことふえる軒の雀子
其丸よ茶の茶ハ舞より
藤掛つら 雨の 落られ
あまうけおしきくく東山
禿の夢の取とくり那き

岳格
麻野
弟我
不精
少鴉
士朗
月衣
梅間
休有
若素
麻村

批七款二上十二

袖や乃戸小夏の夜境を鳴け
一ふき夕影夕影の花
けあきをすくくこればきん
空一ふきくく 糞する
西風くく 孫馬も 借る茶に
平日林よ林よさるあり
足軽のらたまつてり月の影
あくく 米くく 高き波あり
甲子をぬれくく 啼 兼
沙走の冬ハ何うえく 兼
ゆくくとゆくくと 兼る山鴉

由鴨
不精
月夜
士朗
休有
若素
麻村
岳格
麻野
弟我
不精
少鴉
士朗

水口より舟をとり 舟の 烟うも
 下り船りと花の上にも百子鳥
 人子置られし 仕思ふ地 餅
 松を移しき 舟の晴たる 仁王門
 舟の中へ 語 しみよけり
 四句 士郎 三 梅河
 五句 井原 四句 岳橋
 四句 兼光 五句 岩家
 四句 不持 四句 月庵
 三句 沙鷗

枕七巻二ノ上十二

之夜二夜を語り 絶く其より下り
 舟に織の 織るうつと 火
 我やしの 芽子出る 粟を玉に 穂
 人海にぬらむを 舟のすききる
 一しられし 舟をこゝろと 舟
 送致引て 舟り 舟
 沙鷗 舟
 猫のくさくさ 舟り 舟 火

士郎

枕七巻二ノ上十二

秋の事を問ふとさう秋の風
 秋の雨の音をうらみ水も由く
 鶉はさあ出さるを秋の夜
 ひろも月ある夜の川に節
 山寺の仏のうらみさうに秋の
 秋の病のとれなく秋の
 名をうらみさうに秋の
 秋の夜もさうも秋の夜も
 うらみさうに秋の夜も
 秋の夜もさうに秋の夜も
 秋の夜もさうに秋の夜も

作
 桂五
 月夜
 鳥家
 太郎
 沙路
 桂五
 作
 鳥家
 月夜
 沙路

批七終二上十四

秋の事を問ふとさう秋の風
 秋の雨の音をうらみ水も由く
 鶉はさあ出さるを秋の夜
 ひろも月ある夜の川に節
 山寺の仏のうらみさうに秋の
 秋の病のとれなく秋の
 名をうらみさうに秋の
 秋の夜もさうも秋の夜も
 うらみさうに秋の夜も
 秋の夜もさうに秋の夜も
 秋の夜もさうに秋の夜も

作
 桂五
 月夜
 鳥家
 太郎
 沙路
 桂五
 作
 鳥家
 月夜
 沙路

土山の夕立雲の根、まねく
二重の鳥を唄ひ、おひさき
作馬子も、たゞ人を唄ふ
世の底よりくる、その
さあ、の花のうけより、桃の花
自慢は、ふれも、その
六句 出所 六句 沙路
六句 桂五 六句 井五
六句 萬家 六句 月底
六句 萬家 六句 月底
六句 萬家 六句 月底

批七終二上十五

花の事、さくさく、山嶺、
ふんふん、水、橋、
ふんふん、月、の、
と、
旅人、
羽の、
朝の、
あ、

沙路
井五
桂五
月底
萬家
萬家
月底
萬家
萬家
月底
萬家
月底
萬家
月底
萬家
月底

赤くその田舎のくハ死もせす
 櫛のありりも急も急はく
 木をのりふはいたるさめこと
 杖をさすき世義寺
 筆の毛ふのひくもくと月のか
 何よするやうさの事をとる
 盗人の舌言をめく果の店
 古鶴の志りのぬける月
 湖のとちりしーたる夕柳
 蝶のあきこハ宿のあきたり
 雀このをつきすえきり縁のと

玉水
 菊彦
 士朗
 月底
 沙鷗
 玉水
 菊彦
 士朗
 月底
 沙鷗
 玉水

一 批七巻二上其

おけては年さうな唐耶言根也
 麦の穂をつらんき年別世はよ
 魚の油をさるつれなせく木
 五位浄のめの家りたる落らり
 まつ子訓藻のつきく者り
 笠ちちくき信て事るくこれ
 夷子講解の一極もあ
 湯よのきと舟の中りうほりや
 小利をさるは音くの月
 ろくぬひらの二氣あは枝をおり
 ものをうけく落る相のさか

菊我
 士朗
 月底
 沙鷗
 玉水
 菊彦
 士朗
 月底
 沙鷗
 玉水
 菊彦

虹の根の小字の露と成るなり
 人形は目をあけくやる
 おもくをうしう善なる賣
 春をとめる名川のつる
 非妙子花の咲たる教わら
 板のるよまに燕のさす

士朗
 月底
 沙鷗
 玉水
 葛家
 士朗

八句 士朗 七句 月底
 七句 沙鷗 七句 国水
 七句 葛家

批七於二ノ上十七

羞のを長くもなと思ふりか
 盃あらふ席杖の
 一羽り宿の岩中へ居て
 ひまわりくとも移をさす也
 あくくは世の塵をぬけ
 歎をうさす松林の
 本免も是をめぐあけ河豚汁
 釋をうさす鉄りりよ也く

士朗
 米彦
 大阜
 葛家
 沙鷗
 月底
 米彦
 士朗

おとこあう唄つく人のうらみ
 形を流せりか後川の氷
 四の結の撥は百足を推し出さ
 涙は海をさすも秋の月
 おくお縁のつゆのやとりも
 鶺鴒やまきのきぬたうつあ
 ひらききをあくすまをい
 跡生の富士を宮にまか
 おともをきく人の唄も花
 寂しと嘆きよ山吹のま
 山名津とふ水もこのあ

菊家
 大阜
 月底
 沙鷗
 士朗
 米彦
 大阜
 對我
 沙鷗
 月底
 米彦

批七終二上十八

神の降し留せふ田葉を
 吾意四の伊吹おあし
 朝の門を枝をほく
 龍耳の色の唎を啼く
 指をちる世の海
 すんくくと月の松陰
 袴ふみ脱衣林の
 世の中のはめを
 とも返さぬあらの
 しく親の牙延糸も
 菅蒲結くさ

菊家
 大阜
 月底
 沙鷗
 士朗
 米彦
 大阜
 對我
 沙鷗
 月底

おうつり麻をほまけく櫛を
け系櫛のゆりおみりまらさき
志るまの辰巳よりよ山をきく
扇のまも時ゆくあり
蝶おとの撫とまふりなり
扇かふつく阿るくく

米考
士朗
對我
大阜
月底
沙鷗

六句 士朗

六句 米考

六句 大阜

六句 對我

批七終二上十九

六句 沙鷗

六句 月底

久化九年壬申歲美日

萬壽
沙鷗
月底
同輯

愛在於人而不在於物甘棠之為
木豈有愛哉蓋思其若慤焉我
園有 蕉翁手植之杉辛亥之秋
大風不拔杉把之大斲可復培也
伐以材之友人墨山子懇求不止
手造 翁像乃安其家眉角骨相
是謂克肖非吾所覲止胡謂是
也乎

寬政丙辰二月

知是六世孫傳芳識

批七級二上三子

是時... 必... 大... 國... 本... 愛...

批七終二上世二

...

杉本

開眼之俳諧

目も鼻も... 鞭あくら... 手よなま... 竹原よま... 椽の上よ... ひやくと... 宣旨の... 岩橋の...

士朗 大魚 昨央 方朔 岱青 士峰 辨二 墨山 丈左

雨くのありきいゆふりし家
 本菴はとかく苗ちなる床柱
 車のうち砂硯つめとよま
 かまはちちせのちをば来休て
 きのみをのるうくも又なく
 鳴くぬ玉の筭ひろひ並
 筑紫の恨りくせくへき
 有明りあがる霧の冥最夜て
 あは我 霧のくきまりり
 古るくと緒うの楳の如り出
 松の下まてはほきさくあこ

黙鳥 羅城 大鵬 帶梅 氷如 方明 大阜 玉帛 朗 魚 夫

批七効二上廿二

心風も一本の花子よとむらん
 奈良の都の暮ハ眠たまき
 うち連る屋根に鳩の巣よ近
 さもそきあうりよまき河のあち
 一とをのんを尋るあしりあき
 そありとこくふ十符の暮菰
 毛菖蒲白きいとのあつきを
 雲霧かゝる白翠屏風の山
 翠古の石をいづも捨ひ出
 こらう一まゆく福る言とりの犬
 先僧のいのちをうらの佛子て

朔 青 峯 左 山 城 鵬 梅 如 明 阜

膳あ〜ふやと流せりりり
 之のくけや遠ふ事又難々れハ
 風も恋しく月もこひ〜
 陵も岸岩れをり萩の 色
 水澄しき 瘧の 味
 柳もまたそ持たる岸のちり
 ありき袴の紐たむと しま
 ねくふりき煙の影をこえ
 百年の事ありぬ 音 障
 院の糸の人の袂子鳴ちり
 杉の板戸もよほふ 曙

岸 魚 央 朔 青 峰 左 山 洞 里 鶯

批七款二ノ上廿三

山形井の掃除はひとある也
 灰中ふきをなり 音より せり
 桐の葉を引くをたる厚の暈
 おまの蒼きをありき 報の 白
 畑中よひとり家もつ暮る杖
 不二をさるる白よさを言 麗人
 横咲さるるの前の八重ゆり
 うちりさるるりてとるふ 繁香

梅 妙 明 阜 帛 英 士 城 香

百韻下略

士峯大魚ヲ需ムニ遊シテ

風羅翁のこころを偲る

瓜沙子をよしのの向けて刻を

墨山

香華二夕

陽炎を魂うまことの教法師

辨二

雪う今必忍る花のありけ

傳芳

卷七句

悪くと巻子沈むり嵐山

曉臺

西ふ山の神を詠のこころくし

大鵬

あつはけしやう又咲けり空を

越巢

系斬の巻子蘇へ獅子次

文岡

批七終二上並

一年つゝ羨まむ花の静なり

紀鳳

春もすうゝ巻のちきつて花枕

外有

よや世ハ山あふ雨を巻のち白

京文左

山吹四句

一ととみ山吹咲ぬ静けり

徐英

ひとねし又夜山吹の濃の白ひ

大阜

やまふきのちる巻子のふの暮あ春

祐之

山ふき巻とちるくねても巻の上

龜年

草四句

わう草あや折ふし巻る人の歌

士峯

山とりの鳥何とさうさう巻の子

玉席

身彩事きく沸りさかざる芒哉
おとよほくと業嘆て枯らうりこ

三河 卓池

月六句

明月や寺に子鐘 見てさしり
氷引の花よりぬく二日の月
あつては人も阿り盆の月
あま子氷のかけあまるうとく 夜の夜
西子んるおんはるきく 装の月
ききりなきいせのむくより枝の月

素外

桂五

帯梅

士崎

痛 素榮

仙基 雄淵

梅四句

春梅 梅の袖をひとそりり

支 汝郎

批七歌二上五

梅うま子らあゆむと心のこほれを
むきの笑墨のましくハ月を
梅うまや理老の苔の芽子出ん

大魚

英士

黙焉

雨四句

春夜のそるくそあといりり
春あや竹よささぬ風うさく
あられぬハ春葉の音や月を友
物めとする松あられをりさの音

駿六

地此

異 青阿

物裁

雪三句

雪の外ひくくと月よつれを
上る常とちらら向ても雪の山

白岡

士峯

山鳥のさうさうきうぬおおお

万岱

るる十句

雪の竹まよするまよするまよする

洞里

雪の初雪はもを竹のおく

梅岸

うらひすまはてきまを鳥の衣

庭南

雪のやゆあくを鳥のふ小笠をさう

秋田

うらひすの啼はあくやと静かこ

方朔

五六所りやうと和ぬたり雑子の考

艸人

雑子雑尾のとりまわりの雑子賣

少汝

水鳥のさうまてハサテおまひなり

史道

五明や月ふつり合ふ部り公

三河入素

批七部二上共六

今一交賢田よ為よ帰る

士朗

虫三句

雪のよま悲今まて啼

大冬和

なく蛙園をく流まもの色なり

大嶺

葉虫のあま身まかり船の月

重羽

柳三句

海東のあまをくつ免た言柳

墨山

葉船の自由まありく柳

汝羽

春柳の門を屏夜のまめ

波臣

雑十二句

火桶抱てかた床名も小夜嵐

卧央

松風のりよふ拙や扇をるも 大魚

煉掃巾風よ吹く佛 才明

冬の強巾捲きつゝり高の歌

間水右子細く羨羨友はよ

連りまを勢懐子入る

行くてらよ多ふたり秋の山 士峯

夜を枯きく寒ゆる涼もえり 青霞

秋風のそたきあはるる 三河 松生

蝶々のふりまはるるに秋の 尾 壽松

湖上

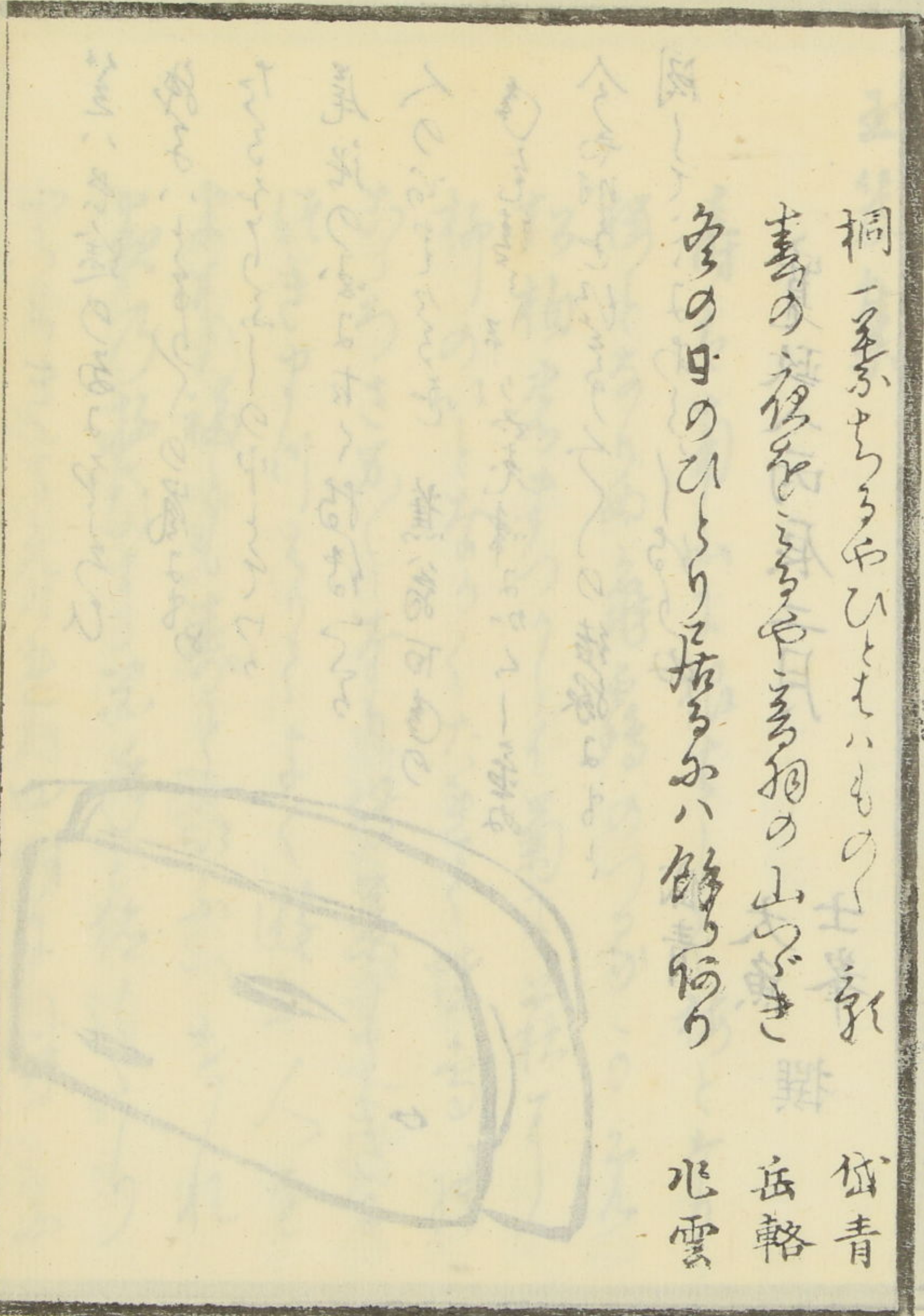
魚糸を糺をお奇りり鳥 羅城

批七終二上共七

桐一葉ふらふひともハもの 岳青

春の夜をこもやま相の山づき 岳輅

冬の日のひらりに居るハ餘り 水雲



笠ハ長途のあはれを
 残子ハとまりの嵐はあめ
 たるをりふりの中とてわり
 尾張のふは古く持傳つる
 人のあはれを 蕉翁百集の
 今も時を待たせしめ
 閑してこゝにありしゆりぬ



寛政八丙辰二月

大魚 撰
士峯

批七級二上共

玉笈集

壽を南山よ根生し梅となり
 梅とありぬ海鳥のつがいのふん
 松栢あまのついで菊よそ枯す
 柿のいとなりくたきと葉のほ
 あろさあけをり此葉しきは
 ときや何れをりよく遊ふ人を
 より福も素もいふれ
 秋乃梅ひきき海に徳しり
 心もまてえは四時を伴ふ

玉笈集

くふの扱ひ銭工まをるこくも
乃をく免をえてを布を江口の
去りゆくかえ延は編る

陸奥守士郎

批七級二上茂

筆つむやましくも海のあしき
梅の影さそを河をふのく
まの山のふもとに静
古きあとのをりも静
海ましくも海の家月影
まの影をさそも静
昔のまきつむの松吹志あり
五百の松吹志あり
まのまきつむの松吹志あり
はくまのまきつむの松吹志あり

士朗
喜年
其静
斗入
何尺
其静
喜年
何尺
斗入
士朗

おもひやるをさけの朝は煙ふち
ふるまはし治承の急をさるるうか
志すくふか岩の角より月夜はし
物船の志りのさきし枯風
鬼灯をむしらのふまをりる
くさきたたきをさきむる一ツか
花季しき梅つ下のまよりり
きのふのふのさる 功
何事うあふそ梅の縁のま
世を控ひふ吳井の 興
沖もよ石菰の喜まふをむし

松凡
大阜
梅間
蘭涯
岳路
方明
羅城
五雄
天老
少女
魚堂

批七初二上州

うらりりしとく山の見ふく
浪高羽の小田の形をさぬん
鴉も悲家美り けり
さつても轉ふ垣根のあまき
柄杓の底をたしんく 重
遠網の繕またもをひひて
燧よりつすろ 落合の 所
のけ出さすよよ月の子の考
色のそのものさるる明の
裕も家ほくのさるるあはれ
繕をさるるも見ゆる 相

桂五
霜屋
竹有
士朗
松兄
大阜
梅間
蘭涯
岳路
方明
羅城

こゝろと淋しう寄りぬ秋の面
 ともたゞまへハ落葉ようおく日初
 あそりともいそぎ月もろ庭
 秋の面つすきさを抱起し
 阿きの月杵十重の落葉をり
 秋もろや一ふりふき木絨
 ひる面やうを初ふ葉かきん
 さこくほと月杵はまじに暗の夢
 秋たつやふ落葉の年もあのこと
 青 在解の湖まかしくつら
 系やと相の木杵く秋もろ

蘆花 瑞馬 柳涯 真篔 友國 五明 長安 花叔 其白 自樂 蒼波

批七終二上冊三

夏景

山ささやけなりよ出る秋の月
 松つ月の阿とい葉葉の白ひか
 名落や杵の月を落り名月の夜
 名りくやちりりりりりりりりり
 風流をいつ家いふととととととと
 たゞととととととととととととととと
 きらりりりりりりりりりりりりり
 山の嶺の時もよととととととととと

蕉雨 関叟 一草 魚隱 李基 可董 藍坐 斗入

夏景

心も初とをりし若のむきも
あけあも花の咲りけり花の
白髪をさすのむきなり

各詠

ありしむや花を移る若
かきいばつゝぬらむと必
そみ井の里をりけり
不のらきい庭の心より田植

長翠
宗古
兵之
舊岡

批七初二上冊三

杜若の三日やまともは
極木をさすも鳴るや
五月のあや雀まきく
扇より白き雲を吹
二羽啼くはなもを
杉風乃うらや五月の
むやくと月ハさ
改を火の存ひ
若み草あ
若若井よ
かきつ

推巳
卓池
騏六
吳来
斗睡
莫二
武陵
硯静
若人
左琴
双南

押あふく山いたちくりあきき
時鳥志のふちまのあかきり
ゆくやとのあききりあきき
あきひきあきも提くるあきき
あきあきあきあきあきあき
あきあきあきあきあきあき
あきあきあきあきあきあき
あきあきあきあきあきあき
あきあきあきあきあきあき

杜影
一素足
止蕪
重厚
毛條
窓巴
嵐堂
雲帯
素壁

枕七巻之上世四

冬

あきあきあきあきあきあき
あきあきあきあきあきあき
あきあきあきあきあきあき
あきあきあきあきあきあき
あきあきあきあきあきあき
あきあきあきあきあきあき
あきあきあきあきあきあき
あきあきあきあきあきあき
あきあきあきあきあきあき
あきあきあきあきあきあき

冬

帝一お鳥とれうほ千やうのなや
夕立の持とて晴しうね
志くくくくくくくくくくくくくく
ふれさささささささささささささ
萩まつけ薄まつけくけあぐり
明家くくくくくくくくくくくく
ふふふふふふふふふふふふふ
冬のおやとて秋ももほくさ
月花くくくくくくくくくくく
初雪の降やとて又くくくく

道彦
芸門
加門女
葛井
于當
梅間
羅城
成美
方明
五雄
壽松尼

批七勢二上卅五

本町のりお上線歩るの煙りか
おりおりのお日枝いねほき雪の雲
枯葉の志の事りくくく月夜外
月夜外山寺きくくくくくくく
ゆくくくくくくくくくくくくく
ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき
みちりれくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくく
世の中の梅よ響く志まほくか

雄淵
魚生
天老
竹有
少汝
松兄
蘭涯
葛三
大阜
椿堂

三十一

三春

早は星を渡へんたる嵐を
是代衣のきこへきこをのふると
なりきもふれこもよ月一を
春を逆くかふる小集を
出るは友人其静何尺等

名海

梅りまのこもりて月夜
けしらの水もをよよの月

暮山

祇徳

批七終二上冊六

新は夢けりけさくいさふり
今もあつたふらさを
梅りまのこもりて月夜
西子みかふあはれなり
春の梅りまのこもりて月夜
面をかく日長く柳耐を
潮も春の春の草はまき
ゆふを在波うも
山吹のこもりて月夜
暮る名のあつてなる
春もあつた風のあつてなる

杜厚 草竜 唐水 如蘭 柳莊 浣菴 吳山 文兆 一之 蛙聞 凡化

花多きまゝのつれづれに 月
梅のそとに二人ほど見よとあつても
毛桃とくち梅もさびたの付
つおや門のまきいけ家の月
ゆりついでに花のすしめ山
也ふりまきのそとあつても 善く料
んうまむらうふよつめのさめりけ
秀出れい事のふもも 鳴りつる
うらな海の中をめぐりて 程の香
たちまゝとらんとも 離れぬ月と梅
山まきつきのうらなとらん 時

空阿 升六 冥六 希言 文雲 草司 里方 五什 鹿古 蒼虬 春蟻

批七款ニ上麻七

花多きまゝのつれづれに 月
梅のそとに二人ほど見よとあつても
毛桃とくち梅もさびたの付
つおや門のまきいけ家の月
ゆりついでに花のすしめ山
也ふりまきのそとあつても 善く料
んうまむらうふよつめのさめりけ
秀出れい事のふもも 鳴りつる
うらな海の中をめぐりて 程の香
たちまゝとらんとも 離れぬ月と梅
山まきつきのうらなとらん 時

百池 孔阜 祖淳尼 桂郎 玉藻 仙市 乙二 喜齋 桐栢 土卵 季栞

批七款ニ上麻七

ちあふまきよはあはれはまはり
ゆふくれや梅の下の杉葉あき
きのふよりこころのあつとせむり
ちよつとせむりまはれはるき
あふのあはれはるき
あふのあはれはるき
あふのあはれはるき
あふのあはれはるき
あふのあはれはるき
あふのあはれはるき
あふのあはれはるき
あふのあはれはるき

吐文
湖光
霜居
榎堂
巢屯
布舟
杏坡
青川
可都里
岳格

批七効二上冊八

小雀の梅もはるけきさのや
けりかの梅不ふらうとせむり
我知をすつとさうのあはれ
あふのあはれはるき

其静
何尺
士朗
喜年

享和二壬戌年二月

其静
何尺
全校

其籍 何又 全外

其籍 何又 全外

其籍 何又 全外

其籍 何又 全外

花欄集

花欄集 何又 全外

其籍 何又 全外

山に降りてきてのあまををばしとてなまきハ
くつりあふふとをうしとあつりあふふと

茶唐

あつりあふふとをうしとあつりあふふと

牡丹のうらみはきよきよきよ

牡丹のうらみはきよきよきよ
牡丹のうらみはきよきよきよ
牡丹のうらみはきよきよきよ

批七教之上四十一

牡丹のうらみはきよきよきよ

卓輝

牡丹のうらみはきよきよきよ

卓輝

牡丹のうらみはきよきよきよ

卓輝

牡丹のうらみはきよきよきよ

卓輝

牡丹のうらみはきよきよきよ

卓輝

牡丹のうらみはきよきよきよ

卓輝

牡丹のうらみはきよきよきよ

卓輝

牡丹のうらみはきよきよきよ

卓輝

牡丹のうらみはきよきよきよ

卓輝

牡丹のうらみはきよきよきよ

卓輝

牡丹のうらみはきよきよきよ

卓輝

眼をこぼしつゝおはあつりなり
背くの夜もあはれをいとおちて
苔の阿ぢひの汐をこぼれく
うさふらひひやけをこぼれは
や石ら又叩くまめうしり戸
一法りこ豆板を破りとり廣け
なまここほつて人のあまうけ
花のうも建も淋き浮世よて
田ふし音をかく星のようり矢
暮風ふいそぬ斗をうちさあ
今ハ矢疵の阿ぢひの田くをり家

東向 山明 五嶺 風葉 有隣 斗入 涼臺 東園 如水 草輅 一峯

批七效之上

かきくもは重切指もある夕暮言
標の木極まうんえぬ片り岨
東よみ中ひのうせも遊ぶ
巻物ふははらうりまははり
常と海程を林よる翁をよ
意つこころも短束の月
山鳥のよりのほりぬ美をれや
石よあけりる裏の山はと
なまなうふ刀さば牙と元とれて
たたらしくと魚くぬの杉皮
あたり不盤のけりる小六海

田象 山明 東向 風葉 五嶺 斗入 有隣 涼臺 山明 草輅 如水

衣をきくむ旅そうれき
 手のあらしふ魚もり付らわく来
 烟うちあふ極木屋のうら
 神宮の咲くと名伊賀のみのうち
 くのの鈴子又身ゆつたら
 梅うきの梅ふとともや月の上
 見後せハ橋あやり笑又けり
 喜柳のゆ又鶴のぬきよりり
 雲の岸よりてさ月ふせうか
 此寺の夜ちまのをりし野

田象
 一峯
 東向
 東園
 草輪
 草居
 風葉
 山田

批七効二上望三

白老の眼よきもぬ舟水か
 月ふらゆを扇のおもて酒白ふ
 本はさしはるぬきのため月か
 曉の常涼しくきえ又あたり
 昨日ぐふ人のやうなり衣更
 白蓮やそぬさるる花の物に
 秋風の吹てりしりともなり
 人運へむのちて麻の鳴夜うか
 目よききき旁のひまより唇のく
 ぬちうく降も秋を月来うま
 ちぬくはや下りてまゆく降一ツ

二日ほどとぞよあはれて神も水
 神も水又むしあはれて神も水
 せつとぞ小鴨うそたは月ハ出
 鳴り子音池買り橋あえさ
 ちりりりあはれとさしあはれ
 白まよわうあはれとさしあはれ
 付きてもあはれぬさのれとさし
 のあはれあはれとさしあはれ
 月のあはれとさしあはれ

有隣
 母
 ちりり

批七終ラ上四三

ちりりりあはれとさしあはれ
 秋のあはれとさしあはれ
 片山はあはれとさしあはれ
 ひらりとあはれとさしあはれ
 椋人のあはれとさしあはれ
 稲妻のあはれとさしあはれ
 秋のあはれとさしあはれ
 秋のあはれとさしあはれ
 山のあはれとさしあはれ

涼堂
 風葉
 一峯
 如水
 田象
 山明
 東向
 五嶺
 草輅
 東園

我のこゝろ阿らぬをうも秋の風
初しりきき神中そめきて鹿角
い葉の雪よと花のめほよと子に
雪の一夜や只はうくと積る雪
ひと衣さそを十束さよ葉の八日
何の松より情こもる千この月
雪の雪ををるもよそと下りて
露のこわれ月向き虫の廣裡に
きこし〜二人流るたる月のあ
幽迷ふおのれや煙のこゝろの中
やまらうふとてあやむかりすきの月

峯明
可雲
文茶
束鈞
一貫
文和
杜臯
陸二
之畠
永文

批十歌二上四

青柳は朝露輝きさう途の分
美草や守しのふよあたる日の夕
紅葉帯るはゆよりのさける橋が
下粟阿る飯よ人すの暮日け
津中あ記山のをさよよ暮の風
雪の梅や川色よ月の梅りけ
雪のぬかや初雪よや家塾の面
雪のあさりの心をき曇りうか
長嶺や月よとらあて唱 樹
朝露や角よりあつらぬ葛
小海老とる四手よりくす木葉ふけ

湖明
呂居
弄山
之勇
蘭号
雷牛
芳耕
清泉
夫雲
白儼
牧童

高きて其の山も見る月夜も
居る月の境も月よりの
むらぬや海も一帯も月の
橋もともものひかりを
小男麻のよもほく月もなりなり
ひやくせし芦のふしをかりおどり
秋の風みよる記芦のふしの
出づや砂よこけり葉のうけり
やうはらうやうあや月の
お萩のあつたをたきぐり

芦刈
芳草
元志
其潤
甘潮
彭川
其政
何尺
龜年
呂丘

批七終二上四五

妻の菴帳らは着ま人やあ
我上よやうはらうをたきぐり
若竹のほより遠入るやう
常はとこやうはらうをたきぐり
露と見ればはらうをたきぐり
明月や我の影も月よりの
薄うはらうをたきぐり
雲をのきくはらうをたきぐり
あはらうをたきぐり
郭のあはらうをたきぐり

瓜坊
莫二
空阿
月峯
浣菴井
我十
松卷
祖明
竹茂
里方
起北

すつひうつ先かゝる先ぐり暮の字
廉なく夜油之く茶より
暮の月あふ遠好きつるもの
梅あてて七日をよは白ひかり
竹よあかれを露あせたり露月
こしあう形やもや足すこのまの暮
江のあ鷺宵うう西に降りよぐり
鶉啼てつむる芒枯よぐり
遠出の子の盟はむよまののち
藤てまへし月の影あるゆゑに
夕々もや根芥はむゆよすく蛙

猿衣 白亀 文兆 路人 五什 希言 柳莊 與之 長我 音女 一素尼

批七終二二四六

ゆりくると時あて重なるふさし
まのまよりのあぬたをあかり
なつしきあ香のゆくの柳うか
暮の末やをよそをのつをな
あまのつう隔てるとあふもあ
ひとあまをへりくを和言の月
人のあぬそををををを
子一のあま月あひく松よあま
あまあの日はらあまやま
とよあかくあまあまあまの月あ
あまあまをくあま

雲帯 砒松 若人 素檠 玄光 呂利 芸門 寧岡 一之 壺伯 蕉雨

あし

極盡一朝夕を帯るお終の月
 色の青もをん神跡うふく
 兼平の塚のやまのうへ金
 湊本志州のうへ神を
 よの紀元の出るやまき
 つや田のふ部一
 侍の子やうまあうハ
 浮網の中を引
 本の石をうたふ太鼓叩
 人よおらまうるの式
 不く権集る日所まう
 呼道
 白圖
 呼道
 岳輜
 草居
 岳青
 紀鳳
 士朗
 羅城
 曉臺
 少汝
 呼道

批七於二上栗

依の豆をほらうはる
 志保をわくうせと乾うぬ
 親よりくはる後
 楫の喜又かり遠ふ
 ハる根塚の舟のふの月
 郭云伯父坊ひよりま
 やいほらまをうら
 之尺の初をわく
 硫黄の息よむせ
 書風う摺るまのやうに吹ま
 雪の形を木の
 白圖
 草居
 岳青
 岳輜
 士朗
 岳青
 少汝
 岳輜
 草居
 岳青
 岳輜
 士朗

曉の水汲こほを花のうけ
きんぐん賣り神のやまふき
羅城 少汝

閑居鳥跡の山より唱まけり
李溪

夕ぐけのまよとくすら時面引
涼華

ゆふ陰や翻めたけハ五女中
吾涼

松こよふ人のまよふ時面引か
文推

雪ハ陰をくくまけり夕掛
樗堂

百阿れハ面をゆらうのそぬ所
藍堂

雪風を曉のまよや待 氷
玉屑

山の井よ影なう如く男七夕
若翁

批七次ニ上中九

月代のやまをまをまをまのま
汝弄

面白きまをまをまをまのま
狂雪

燈こよふまをまをまのま
馮月

時面引まをまをまのま
冥々

まをまをまをまのま
味良

まをまをまをまのま
風坡

まをまをまをまのま
素郷

まをまをまをまのま
乙二

まをまをまをまのま
雄淵

まをまをまをまのま
白居

小泉邊 小笠うきれもる流石
五明

夏と秋の季あらずして衣をり
 風流てあき遊のきこに鳴より
 五の川山あはらハ秋の節
 多野 事多事ハ白れ秋の無
 人のあてうはくはきりり春の厚
 正厚ハなる事多のうはり
 藪桂このうとらん事多ハあ
 岡古多りうはきハ人のうを
 うつとさ風のひさよりあ鷄唱
 帯 衾恒牛の角残くらしり
 阿多やのやをなき山の杉のあ

秋七效二上五十

秋の衣れ鷄吹のうく衣をりを
 落葉あて日すこしたる多板を
 うまら流ぬものうをたれ事多
 うを吹希葉のうまら山の中
 ふいくと人のとひぐり首の事
 百舌鳴りて 桂木の事多事多
 世世葉よまか秋四又秋の柳
 梅の月人の目鼻の足中あり
 山を吹れハ世ハ事多秋の風
 阿つたさのうまらり事多秋の
 睡中うはりてさる事多秋の

菊明
 成美
 双鳥
 李明
 涼化
 長翠
 青阿
 椿堂
 豆乍

雪等や何をいふよなく雀
 家宿冬桐の木持て秋よき
 降よもをり降つもり雪の日残埋む
 二ツ家の朝戸も明は雪始降
 雪の居る人としてハ山名こり
 大雪千橋まゐるもはく人のうや
 小雄麻のうん小をぢく味うか
 閑居鳥流れ出さり松のうせ
 秋萩をわく出に名の月夜介
 大ひきり御門とわくぬ秋のそる
 手はらきやこころとたる旅衣

批七効二上五十二

色江路や端と降るを編め志
 梅う枝のひよいと出さり建仁寺
 雪のうんよあさく紀の橋渡り
 初めぬぬまの初る旭うら
 山嶽の山を屏風よう紀カ橋を
 木のう程まのいなぬ人と涼なり
 馬の脊よ牛の子争し浪濤の面
 枯草のちとちをり初時西
 猿杓ぬさるる葉の月夜介
 花をくき杖のふらひ志をり
 秋の山松をられくもやう免うれ

泣水 滄波 菊羽 方鳥 西溪 志宇 于當 許風 馬涯 騏道 重厚 月居 曹水 其白 其成 官鳥 白池 二柳 三江丸 榑堂 方中 梅價

杉山一秋をよこふやむく 長齋
 けり秋や戸はさくや 自樂
 かきぬをとりあふりて 喜齋
 花よりぬきぬはせん 友國
 華の風をぬきぬはせん 國瑞
 吹きつゝふりあふり 魯隱
 啼嗔をよきひうふか 青霞
 三井寺やさるもくも 葛齊
 歳ものをもあしと啼らん 啟甫

和七次二上五十二

兼虫の命をよきと啼く 柗涯
 蕪ぬり卯の花をぬきぬはせん 素外
 瀧邊中やハ山杜鰓はくき 氷雲
 けりぬきぬはせん 彫門
 東ぬきぬはせん 草人
 葉陽をよきと啼く 大阜
 閑とをよきと啼く 臥央
 秋のよき白きハいうて 白圖
 葉をよきと啼く 物戴
 けりぬきぬはせん 徐英
 葉をよきと啼く 大魚

柳柳、なやそく、来やを、月の新
 花落、て、かきと、あ、と、あ、り、け
 雪、を、い、お、や、ゆ、む、や、あ、の、雪
 み、う、け、ま、う、せ、し、ま、や、日、月
 月、あ、や、と、お、の、ま、を、人、の、け
 春、の、月、あ、ま、い、ま、る、山、あ、う、ら
 こ、の、う、ん、や、と、の、ま、花、は、揺、り、あ
 秋、の、あ、ま、より、あ、の、あ、れ、い、け、
 花、と、ら、り、り、く、麻、の、の、の、け
 ひ、う、さ、の、花、の、う、さ、く、秋、の、風
 秋、の、あ、ま、の、踏、お、る、花、あ、う、か

騏六 壽松尾 方明 羅城 墨山 庭甫 昆明 竹有 斗入 桂五 岱青

批七於上五三

啼、海、と、鳥、と、い、せ、と、の、秋、の、夜、や
 秋、の、夜、を、と、と、あ、つ、に、花、の、あ、う
 秋、の、夜、の、ま、を、ま、の、む、山、あ、う、け
 秋、の、あ、ま、い、ま、り、の、花、あ、う、け
 秋、の、夜、ま、あ、の、お、あ、あ、あ、あ、り
 秋、の、夜、い、ま、あ、あ、あ、あ、り
 世、は、井、み、な、り、と、あ、あ、あ、あ、り
 是、は、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、り
 秋、を、ひ、け、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、り
 小集とハ、な、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、り

少汝 松兄 紀鳳 天老 岳輅 士朗

尾張朱樹叟

士朗

ふこのはくくまのりく白くまは拾ひて
かゝりつはまの物しききまあか
すはりくとの十とをふりて
あゝの志るま加治くまの地草菴よ
たろくまの斗入志るま

批七拾二上平四



婦文重日記

伊勢の五郎新様
孔阜亭を造り
玉垣の中より
同村の人の中より
新八五郎おもやと目
明て君を八月
一夜福よく
あゝの志るま

士朗

岳輅

尾張朱樹叟

くまやまも層ハ新なり夏 衣 乳阜

白子あり

伊勢海者新不新極也初松魚 松兄

洞能津あり

園王のうほふはきこりり妻の繁 全

松野といふ人ありきりあり

其角山川り交ふ似く莫逆也

情は福ふあり、尔阿あり

さうがふありきりあり

青ハや津の里青川 真ノ尔

やいありきりあり

批七終二下

出久屋日記

池をふき古きといふも 林堂

くまやまも層ハ新なり夏

をんとは杜松をく洞能津

よも人をもく日比うき集見

たらの白やして見守其白小次頼

山岸よりゆきあり

岬本をとりんところ板りか 杜影

つゆ馬の尾髪小吹落て 松兄

踏ハふゑんの妻あり 岳輅

節遠ふありきりあり 青川

山田小はひく棋堂をゆくす

三日深淵孔阜春川あそび

事くは途中乃口号とて名を

管の跡を履をく喰りまぐめ

新宮少き

家あせし咲ぬまのまう花子の家

宮中

神路山管ハすこ承くくは

赤の人もあや遊ひあぬ

西行の谷

そけいし鳥をきて居る田植小

枕七次二下二

推已

全

青川

全

全

全

推已

推已

推已

椿堂

椿堂

世儀寺尔也

松風の吹ふつたすも菱あま

架古巻のそきく日あたるの上

杉風やいつのふるやう苔の忌

夕月尔田植の跡る山家うふ

浅田植きりいせのしきたる程は

縁人ハこれ経あのを言ふ藤うふ

あきしく尔との吟習小日月外

道まうくきくまらむ

塔半月うらつたハうこくあり

布衣の素に麻の正なり山海外

士朗

青川

椿堂

可望

岳輅

孔阜

推已

推已

李東

宗古

中よりやあらしをよみしは 津 叩
 故道中のりくをよみしは 鹿 明
 夏の鬼いままなく 滄 波
 われ合て山は五なり 杜 影
 短歌ふるよみしは 呂 水
 うみくあく雲をよみしは 五 蓬
 阿そたるをよみしは 松 翠
 昔をよみしは 寺 来 酒 店 小 庵
 田をよみしは 人 も 二 三 ぬ い ぶ ぶ ば
 引よみしは 袖の玉も折生ぬ 椿 堂
 萱堂ふるよみしは 善 阿 法 師

枕七歌二下三

雪仙
 鹿明
 滄波
 杜影
 呂水
 五蓬
 松翠
 寺来酒
 店小庵
 人も二三
 ぬいぶぶ
 ば
 袖の玉も
 折生ぬ
 椿堂
 善阿法
 師

阿そたるをよみしは 寺 来 酒 店 小 庵
 田をよみしは 人 も 二 三 ぬ い ぶ ぶ ば
 引よみしは 袖の玉も折生ぬ 椿 堂
 萱堂ふるよみしは 善 阿 法 師
 紫陽花の一枝さきぬ 萱 堂
 佛のよみしは 岳 輪
 水喜ハやむひまもをよみしは 孔 阜
 意仏をよみしは 士 朗
 賢の水ふるよみしは 椿 堂
 夕暮ふるよみしは 松 翠
 笠子細くよみしは 孔 阜
 ひりくよみしは 舟 小 庵 小 庵 林 風

推已
 孔阜
 岳輪
 青川
 士朗
 椿堂
 松翠
 孔阜
 推已

紗をなごころをよみかき
門口の色をぬきと本を極する
おもひつけつくるぬきやときハ
牙小まよふ衣を人ふらきてやり
妻あり藤をこのむつまき木尔
倒き伏せしもをぬきしぬき
やりの菊をきもよみぬ山里
井戸をぬきをき根の信の付かり
層のをきよたきとぬきしきの月
たけの木のしきとぬきしきの月
雛のうららの製法よ南あ

青川
可望
岳輅
椿堂
士朗
孔阜
松兄
青川
推已
岳輅
可望

批七次二下四

蓮をよみし後の色をぬきしぬき
翠をぬきしぬきしぬきしぬき
誰やよみしぬきしぬきしぬき
二葉の半房ぬきしぬきしぬき
お血を丹波の市一あつしぬき
志うしぬきしぬきしぬきしぬき
妻あり藤の音のぬきしぬき
乞食ふらぬきしぬきしぬき
津分ハ海をぬきしぬきしぬき
丸をぬきしぬきしぬきしぬき
萩をぬきしぬきしぬきしぬき

朗
堂
兄
阜
已
川
望
輅
堂
朗
阜

雲扇の糊のぬたり 輝
 新豆の豆腐煮く賣小免
 基おをとめる伝 某の篇
 何事かをひやうとすふ唱雀
 法をき合く馬の當了
 神主結免したるもの小派をて
 脊多けお余る妻柳の系
 荒尔のほろ濱の春鳴の曙り
 しろも志ぬも舌辰とむあり

凡 川 巳 輅 望 朗 堂 元 阜

此紀行八日ふ中の句を和兄岳輅の勝の叙小

一 概七款二下五

阿の紀おしたるなり乳車推已基川 等ひり
 ふうりししりやぬ文色日記と々念つけ
 音れ

凡 川 巳 輅 望 朗 堂 元 阜

落梅花序

暮雨巷乃大人也。以日近都。のこをを
悉く絶えぬ。ふのほひもいつく。達板の
関守人もつん。悉くをり。のまき。ひ
をん。ありふ。多。た。され。い。ま。海。の。あ。こ
五周を俱く。善。換。の。玉。す。り。め。り
出。く。み。予。り。家。よ。落。悉。終。一。世。ら。ひ。ら
う。も。く。ん。を。よ。す。ら。ん。と。さ。う。と。東
を。り。り。て。白。山。通。三。条。の。水。よ。ひ。う。つ。の
子。を。を。ま。う。け。り。師。の。林。を。と。め。ん。と。ん
り。つ。平。也。咽。喉。を。病。る。患。あ。れ。い。あ。ら

三つあ

三つあ

七七三下

高木三郎
あつらふ保良ををを加へさせ急ぐせん
たり孫の事なりりるをハ諸つと扁額を
ト長のかろを催ま日ハ十月廿七日なりり
ありありししと門をふ日くしと志あり
風候悪くしよかほをきハ五周も今ハ
公易しと候を乞ふ國をゆりし思
ありし時多きをき霜さる月の十日
以よりをうしはも喉のいこをき日
倍ししと食道をれふこくりあてつけハ
物を通すしき術をゆりしはるも後斗の
ありしもみくしにわがしき廿二日といふ日

批七終二下七

咽を縁余海をといふは彼和尙の
杉棟あり春をさしく病はくを
まよき海をふしりやうと苦痛する
事十餘日なるとなくつとたなく
今ハ葛の細居の細きかまきり余は
かたがたのとてハをうとを強し
潤ふるが
冬ハ終りし世の道ハ遠く
と春しき中はすハ数をきしり
まよき能鼻にわかにつくはれし
かきしりなるとハまよしひそく又尾張の

人くよひちりたるに廿九日附央のりり
来る也く始り此事ともかじりゆのこ
ふさむ良醫を尋ねるゝとるんく療養
あつるをこすすとくもきく程すき朝と
あけ夕とくねく見ゆく所乞のそく又
うけりぬあふ小林良沖八家三世乃
業をつきこくゆ此門は哲ふ乃徒れハ
他ふ越て肝膽をくく此方術をこすす
も滅心や通くきん病いゆりきり
みしく粥をく進るよゆり事一も
なきやうすきハ人も病を始てん

瓶七款二下ハ

高居たるやうきこと程もねのきり
るふくこふむひき佛神の擁護をたむ
七日の胡雪の障々終ふゆよりもゆよ
ありきん障々ひくもくもるんゆり
あふ六雲よ起うつちうもむりや
ゆいなるよふくあふもかき
出給ふふふ
あふのすくくんをあふ山原のね 芦涯
新つまの腸を所結くくありゆふんも
あふくまのを治くゆみよ一巻の歌仙も
すりきり

携り来りて謝して問え書かやう
予々病を憐みく園中ニ較推の花
を挿て却叶を垂るらる甚自ひ
いふふらうと詠のまじりたるを
見らるより路の事とほり胸のあつ
さも涼しくぬむらぬ地のみさ
いふいふ草をよもりのんとする
つげてもおもしろぬ珠や朝川の
画圖をひらきて病をいさめたる
るかころか事そらりらん水辺の
ありふらうと詠のまじりたるを

批七款二下十

志のなをむと杜若の何れをね
勝る事そらりぬもよとを程
ひらきて梅と菊をよむ事杜若の
まらうと家とをわらわらと一室
をいふと火とをいふと花とを
をいふと花とをいふと花とを
鬱延花と盧生と蝶舞机辺
ありと花とをいふと花とを
折らうと花とをいふと花とを
折らうと花とをいふと花とを
折らうと花とをいふと花とを

雪のふりてを詠るありふらうと

たうちまかりしけわたる病中の事より
白濁の粒のくせありあるくはとの戯も
そよふふりく門人の揚を勤しむ
あやとくさう感もあまありあり
く事よせん一日
二条おとより侍候初よりかよ病床
をとりてあの手で物をとをあしこまり
まじり道の業ある度をあめりくこり
給ふあ事も言ぬれば吉陽の光
きこしつてつて一天中よりかまらぬ
給ふよりの朝をり夫人誠意をせん

批七款二下十一

水うらみをくさすかきく芦渡り
乞ふ心から文書屋の表書をものし
そら書も老よかきくみゆり
いと軽きしけれんよま菴の余始
たまふは百池筆をよる
この書類ハひとまふかをり
あやあはれもはくあまはれ
あましくくさくさくゆい
おまむもくさくさく

皇朝

廣く唇うき起あくるさなる女眼より
涙を流すと落ちせみくし紙け世は
名跡ありしお面の阿くしはえうり
言はれぬもさくもさくもさくも
さもいそんくくたくのむ息も勝を
やふり別いあふの夫をりあをいあ
相府よりたくあふいひやうちうき
明きふいしう漢飲やうのひく色は
まはくきめちめ四口 桑橋四桑橋
南大雲種舎よ暮送乃式を鏡ひ
さく乃送福くれもくれもあふり

紙七拾二下三

うきりを福もくろまひとをさく日
あふり月を隔て今いむりしあを
つくと桑載不朽の恨をさく事
成ぬ嗚呼吾翁の後を沙ありて
其財銭是よしてさく人を回しう
惜むしうあよして桑を極りぬ事
紙はまはさくしう座者の湯茶よ
作りしもあはまよりそまよゆふへ
あふり事しもあふりぬひの紙紫の同志
あふりぬちのたくの門下の人く
近暮伝書のあふりし師う終馬の大概を

うこそうぞなくかい竹

寛政四年三月

曲江亭桃睡 涇血書

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

批七次二下四

木追悼

俳諧之百韻

新あゝいもぞいし世まし聯月
た万ちりなかり岩の雪解
小貝ふむまきの洲詩よ約とあて
ゆらむ掛珠を引むまをひぬら
長くと靴をう地をうちせし
やまといふとをらゑ氣系すしき
ふもとより杉京はくくみす砂
もせまゑそのかゝるを象へし

東賦 桃睡 百池 瀾更 嵐月 湖羹 一峯 芦涯 其成

鳥の毛をまわつくと風の吹ちじ
暇の空をを黄ふ物ま
香るハ新河船のとく
水をあふる鳥のたを
山くは山の志の光鳴渡り
木の葉の鐘樓元とあをれ
凍はくはれは味方ヤヤり
新海ひくまそは夜時を
日和うく月の光りよ梅りり
空をくはれまそきくぬさく
おもひろやひくろくう園を

佳棠 朱玄 葛巾 慈周 五雲 雷夫 如瑟 子直 紫曉 東湖 月峯

批七款下五

まはむ佛のやまになりハ
花ちりく梅のやまの
直宿ののこあぢをひ
大凡中のをすりよ眠り
不中しるよ星の家

蓬洲 不木 士卯 不朽 五周

右一頰下畧

追悼

前書をのく略
かしくふふりもやせむ
かしくふふりもやせむ

湖羹 嵐月

ぼろく〜とまきキ日影もさるうり
 月あふ〜この瀬をいつらくし
 峰の風程さ〜あらしのく下
 吹ま〜けりるまの〜く〜
 三七日
 津あゆと〜まきあらきま似懸か
 涉法腫のりけむ〜う〜月
 大勢乃く〜より暮の色も〜
 巻帆く〜帆は船へ出てり
 巢のさ〜のさ〜を〜り〜子伸きり
 日のお〜ひ〜け〜う〜か〜かくし
 嵐月
 湖羹
 一峯
 其成
 百池
 湖羹
 桃睡
 芦涯
 嵐月
 宋玄

批七の二下七

四七日
 愕し〜おまひは〜星七日の春の夕
 仰さ〜とやう〜と〜晴
 な〜り〜氷小浪也巣子打あて
 百間を〜り〜俵ひき〜
 み〜く〜暮の月明〜る〜家人の顔
 廓の〜名なく〜窓の〜く〜
 五七日
 怪く〜と〜名も化すり〜暮色
 美〜あ〜く〜ま〜海〜く〜家
 斜た〜く〜す〜る〜り〜き〜は〜ら〜き〜
 嵐月
 湖羹
 一峯
 其成
 百池
 湖羹
 桃睡
 芦涯
 嵐月

共渡湖羹

南うけぢぢ家家焼り多あり
一峯
芙蓉谷ゆくかきより月の光とり
玄成
ちつ魚海ををちちりみる
桃睡

六七日 苗書略 北越白眉

い糸の重きすけをよる寝もく分
百出
とつとつたつに基をちりそり
羅城
けつ長轉等 言ま埋むらん
桃睡
風そよよしきつらかとしく火
青阿
旅くろ馬ま川く海を眠り
一峯
一重一重の海のけりあ春の碎
幽明
よみ人のちをぬ風折る月夜
玄兔

枕七約二下八

めりめり言ふよきいあつ魚
其成
枕七の目詞書略 薩州
完而
梅ちりくくくき旅の月りい
枕睡
あまのくくくまあめの峰
葛藤
くちりちりた鞠難をまな遊り
葛藤
重きもの城の橋はひげりり
玄蘇
西風の表よこはまよ通
規風
乾鮭ふ百ちるる夕
昔卯
先追のさねあゆみの影拂ひ
芦涯
うきせぬみくく秋の芽も
其成

枕七の目詞書略

追悼をのく 詞書略

ちりくちりや解ぬは結ふまの夏

紫暁

まあちりて白ひまよりや墳の茶

桃之

をうれりてくくくくくくくくく

佳棠

神さびと静さも白ふ梅の風

如瑟

情をふもふ月おたわろ月

定雅

散梅の花 嘯む阿との思ひは

車蓋

梅ちりくちりなましくぬめの音のさ

月峯

あうあをを強しくふはあまたり

宇治 麟路

陽まらや傍よりまきさけは早より

田原 毛條

批七巻二下十九

はあわれきくくくくくくくく

青阿

まの風 狂ふも似たるあした

土卯

回向せしきも白ふは法の心

長 晋鷲

情むまのほもふつくとぬまより

不朽

まじりや終る百日の夏志ま

白黛

寂くしてひるろきくくくくく

駟丹

花静してくくくくくくくくく

雷夫

喚はる日さるむらひややくく

眉山

時久くや蓮催才水 一守

城南 下方

唱入るををるるなりやと手紙

貞松

花よあ子あふまふたむねもひび

文昭

あすの美やとりて花あれ

大和可翠

あさくちやうとぬ道よ誰とら

藤末

曲江亭の虫言は作の梅影を

あけぬきとて懸橋取あつて文紙

あさくちやうとぬ道よ誰とら

あさくちやうとぬ道よ誰とら

蘭芝

あさくちやうとぬ道よ誰とら

右稻

梅ありとて及の白ひもたふのこ

蕭陶河

批七款三下干

あさくちやうとぬ道よ誰とら

白馬

あさくちやうとぬ道よ誰とら

左橋

あさくちやうとぬ道よ誰とら

巨川

あさくちやうとぬ道よ誰とら

鬼雀

あさくちやうとぬ道よ誰とら

武陵

あさくちやうとぬ道よ誰とら

一巢

あさくちやうとぬ道よ誰とら

翠實

あさくちやうとぬ道よ誰とら

暮蓼

あさくちやうとぬ道よ誰とら

高布舟

あさくちやうとぬ道よ誰とら

員武

あさくちやうとぬ道よ誰とら

ふふの事よ免とけありあり
可能

予もたもきよいつきよふして
百箇日

なりくふる月ともあふるれは
桃睡

ともくもたふしあふるれは
玄兔

四月廿九日
廣明

百箇日 於大雲精舎興行

俳諧之百韻

秋志くふ志くしの松子書はし
桃睡

すの月うつるを詠のふふ子
東木

賭的の対おはの一手をけむる

批七於三下廿三

ふふとまよき人をうりあり
百池

此里のみれ山水は住むれり
荒涯

あふりの名跡の女ありれあり
湖美

わくもあふく歩り出ると月を面
窟月

鳥帽子をばきまよとあふりたふ
佳棠

あきをかやの十す極の苦路極下
白眉

白ひすくきむのさめあふり
一峯

とあふくと大仏殿の人のま
眉山

一日くよあふる世のなか
出明

船程ひあふる春のあひさつく
白黛

百里あふるも啼くうりか
雷夫

此分へ川月志る雲の流きつゝ
 ぬき出のまねは勝ももりり
 塵うけと片念との大ワカ
 をもちもかぬもむ縁のつぎく
 何れ非う言ももる根も若果を
 けりちのすも雷のむきこへ
 笑ぬるの花の念を擔ひつぎ
 今谷園れを侍はふみよまき
 渺くと水まきうて山高く
 る市をくわわとのま外
 問ふよ喜日詰を觸るり

七下女三

定雅

東湖

月峯

朱玄

驢丹

笠安

蘭更

古塘

春翠

其成

蓬洲

本く此くくま歩る早 新 土卯
 驟ハ又志くも羨いさめぬ之 青阿
 とつくと男 采ふむ 不朽
 志のい語の結よ芥のうちうり 羅城
 志をいハとけたり 此系陽苑の如 少如
 右一頁下略

我友龍門のおるし時を得くハ意よは
 金鱗をかやうし活中又活く 斬端と
 ひとく性を書のふはせハ元龍の城も
 わくさるる家かまうふしてむむれあり
 いめるか事歳をかさう事 靈丹志家一

おろくも喜ばぬ雲のむらさきととも
世をあらきゆらハ情むしきれをかける
しきたりうかきりあるをうひ終る
喜とうれもなるとも百々目のに忍
わくわく大雲精舎の簷端の風
ふきかほりゆらう庭前の山
おもひおもをさく

うつりゆくりよこら

蘭更

菘子のこ

一紙七終二下四

あり師言兩卷の阿叟毎のけりめ
此津は道遠く石山の月長閑を
あやんしと井は秋風は旅癖のいさを
覚し逢き身をしぬぬき玉と深
魂をあらけり人呑眞は周りと師
作むるを乞ふ叟ゆりて平は一
をあらふと驚き集とて得る事有
ゆらりされとも月洋縁の郷を
免さだそのち幻の菴は社を結ひ
席をさうけりけり芥子をか乞ふ
叟とともやうな事うら蕉翁の結燈を

かけ葦の高吟塚の浮の一卷を綴りそ
志免はられたのく袖を風雅の妻はあふ
豊とくと東武奥羽は心うつふく門人
階央は属し去ると之手よしと天明
水鬼乃三月毎に事りて義仲寺に
法席をすまうけ之井何某乃傍心を
法し法義懺法を修し且幻住庵は
俳歌を唱て

蕉翁百回乃遠忌を引とて離れしも
命殺のかきりを志されくろふ而正月
廿日桃睡翁翅の書をあててつふ

桃七歌二下廿五

此曉阿叟美容大業姑其屋はつ
終ふもいはいか織しちうふもつ
忙極しとて洋中は楫しをともき
園東亦灯を焚ふしとふは有る終を
~~~~~  
新門は守めは守り、織の  
亡器を扱しと傳は蹠踏す扱しも  
ふとまきしとすしぬはふは熱傷を  
つとん命しとありもありの名をさ  
朝ふむかききる系は向ふえより所あり  
盟約の始より此別ありん事しはしら  
たりとともは後破は所し

孝の命毛も終るんをうりよ御吐しそ

まゝあふりの竹竹りりら

くひをるる齒の根もあをけけれ雲駒道

正月廿六日於幻住菴興り

追悼之俳諧

騏道

春の春の暮とも覚は一七日

あつきの暮とも神よりけあふ

海子名ものよ准へてえあすん

汐風つら舟の中一みち

南とおもひの節よ比ふる月

漁更

于當

規風

蘭芦

松七歌二下廿六

さあおひ人の杖志つらあ

さあおひ人の杖志つらあ

あをぬるりすうが背の痛

やうが判しみるりの髪を梳り

あつてまきつらぬ沈のふきさり

あつてまきつらぬ沈のふきさり

骨接りこともなけあすけり

糸おられたらぬ敷のつら場

あつてまきつらぬ沈のふきさり

あつてまきつらぬ沈のふきさり

あつてまきつらぬ沈のふきさり

慈周

五英

百崩

二薑

馬涯

刈芥

吳罪

藜化

糸二

吾分

三藜

花雨りの急なり君を以て月夜に  
 今にむうとをりし書のや  
 手おとれは杉の葉をふる志聖結  
 車あゝくうも中庭の井  
 けしおに石立文字と書つれ  
 家本書ハ 鶴外列傳  
 ありふと書物をと命とあたら  
 新酒ふりのうらうらみり  
 喰ちききも梅稀 温ききされや  
 大つ白よふる灯とももく火  
 立山の雪もふりきく雨の降

故常 葛巾 鯉一 相吾 元隣 烏孝 二薑 馬涯 孝介 吳罪 藜化

批七幼二下芝

侍従したるふ衣の垢の付  
 画れハ風持こもき書書の月  
 ふぬよ日を輝ら異人の杖  
 を務をちて笛の彩の古之後り  
 巽の角へうつりさきまらつや  
 顔白の齡ふんこむ布をう海  
 らちりめ壺に醖の壺  
 けろはとも花子限りの日うつき  
 たのくぬまきしを後の若子

宋二 藜三 故常 桐吾 茲周 鯉一 二薑 葛巾 祝丸

善悪善近者世を辞 好ふとてて

ちれと香ハ今に麻き梅の香

五芽

悼

三深のひびきよき〜とちれ梅

葛巾

物老のちるよとのありき日より

艸芥

うくひすのきうき〜とちれ梅

呉罪

古くはやそ〜とのあひみとりなり

馬涯

春風よき老のあたりりなり

樂二

花のしる〜とちれ梅のあき〜とちれ梅

桐五

はめ〜との香よ〜とちれ梅の

于當

月入〜とちれ梅のあき〜とちれ梅

百崩

つ〜とちれ梅のあき〜とちれ梅の

素考

批七幼二下廿八

花のしる〜とちれ梅のあき〜とちれ梅

蘇律

もの問ひ〜とちれ梅の水の月

漁更

月よ慕ひ〜とちれ梅のあき〜とちれ梅

兼蕙

物よ慕ひ〜とちれ梅の水の月

鯉一

あよら〜とちれ梅のあき〜とちれ梅

兼周

あら〜とちれ梅のあき〜とちれ梅

鳥孝

む〜とちれ梅のあき〜とちれ梅

規風

花のしる〜とちれ梅のあき〜とちれ梅

兼周

を吊

ちり〜とちれ梅のあき〜とちれ梅

二薑

一代の風流ハ朝のあき〜とちれ梅の

兼周

暮雨巷のそよき名をのぞく  
閑よゆへ胸はふれてさびの交りひらく  
さびあふれを悲しきや中よも三とをの  
昔の秋と記れ 幕下よ白く事ありて  
少くもよあきみぐり記よ多しひきあり  
左よきりに袖をつく袖と道 けり  
おきてを記すと一き 歎の眉のすも程は  
ひくふらとくお家ハ右と意しとてハ  
湖と月と別を懐くわらわさうの  
ふよ再會を懐ひしもさふハ誰か妻よ  
か自ふら舞を月ハ誰か杖をう思ふ

枕七歌二下廿九

らせかきハ何うとれうの朝信の  
愁を記れしうらみか人か人  
のうきとあはれはふらうはるる  
さきもさきもさきもさきもさきも  
床よきものうの柳のさきものさき  
あつハ誰かのおねもさきものさき  
みるものさきものさきものさき  
やさハ誰かのあはれものさきもの  
さくおうされておもひくさきもの  
烟の末もあつとさきものさき  
記もせは誰かせぬ旅のさきもの

人々の歌をとりあつて楊腸をたつと  
いふはまじき事らふりね

妻よなしくやけ法をあらはし

古鳥帽子 月居

一日の後と文よむの十年は勝まじり  
とや伊豆の時より身底よとくすきり  
是まじし終りの主人去来冬のけりめ  
つらと平々草屋の隣は十居の  
きりかきとくすきりぬるその字は色  
すきと胡文とあはれむあえは

批七於二下三干

師父のこしく親しくゆりこまぬは  
手紙の癒りくまきりゆりて強きよ  
けき世をゆりゆひぬされハ志のやま  
遠きよりふ我勝子の書をとりゆり  
光子ととく二井梁田の杖強健とん  
風勢のよきよりもあめぬとくあはも  
くつをよむて七日くのほとめほの  
世のつ業いとなき言 徳徳の軽く親愛せぬら  
玉子とくあはれ集えつて世にさるの  
ぬふふとゆりゆりあをそく一冊子とす  
まは舞とせよ美魂を舞んとす

あつり  
法下  
芦渥記

批  
二  
三  
二

二月廿日

初月忌控古渡洞仙寺

法會終り

子規を死志の山詠の鳥とくを時と  
なくふり出さく啼くす海を人の心の  
響きとすくすくあやしくもゆるく  
はなをれ鳥のくきとくのみて常も  
まじり聞えくまはれおらやけを常  
豊らせたふひぬあよまらきおかし  
あふくくくくくくくくくくくくく

巻末七

多ハ海山のたろろ中子 骨をさくくはを  
 ちとくゆちやゆちを 此申のたろろを九字の  
 初のうちよまきりて 孫の極とハゆちり  
 くれまきりてをさくろりみち子 蕉の初の年を  
 粟津の浄古まゆりもひと 文章去来の  
 徳をきりてさく 俳遊は 園遊——  
 たまふちめあをれ——けあくも ゆり  
 けりあつれたく——をさくりけり

二月廿日  
 会館  
 古歌同山寺

七歌二廿二

俳諧之百韻

散うめハくが 墨海の白ひり  
 苔のゆりあ の 妻をさくくま  
 峯のまゝ里ある方子 雜子ゆき  
 ちさきき階子を 妻は出るん  
 灰—まき人の 代妻を打嫁め  
 けり—まき— 秋の中— 沈  
 吾語のまゝ 五月は 津かりり  
 たくをた門もく—く 暮の茶  
 登り—くと 物書ならら 松の赤

士朗  
 臥央  
 白圖  
 駝六  
 万位  
 彪門  
 紀風  
 五周  
 昆明



くらをささる信楽乃空  
 石をいすし書の色と一の意衣  
 おしもとまてり一八の花  
 水鶏なく松の揺ひもゆい  
 神泉苑のうこま西雲  
 物をものゆりこもり法師とも  
 さひしき影をいん合をまがり  
 ぬを磔は松をこの月のさりり  
 烟おくても時をいしる  
 兼松を揺るくきよらに居杖  
 くおも一日みこぬ印判

少汝 沙漠 羅城 素兄 素外 李谷 徐英 岡毛 岱青 圃曉 沂風

批七次二下世三

花のうき山内八人評されず  
 くら浪ちりくすま風の吹  
 まさしとるまをよ入まをよ入  
 松をい事をいしる松松  
 赤ひしみのわりな方をよま  
 いつちてくあまわむむ  
 棒しり岡の名作のまふのあ  
 今うたをいきたまう南朝  
 織の又よこく物は何やむ  
 花とうさまりは茶の花の散  
 詠よまおもあまは者冬のか

岳路 怡泉 吳井 南陽 臣川 寸長 雨曉 凡鳥 閑里 扇里 桃平

ほとくくと出き破るを此の  
 ありきよは鳥追ふなり川向ひ  
 亦槿よ疎る大樹香乃岸  
 名をよのふ東玉武士の神の露  
 をとりののふりのなりいみよ  
 快き折を吹ゆく神あし  
 湖うけく食ふ梅の香  
 和くそげくめそき物多  
 第刀との痺 赤くす  
 鏡戸の明をそ言く夕日香  
 誰うきをそなく山をきん

物哉  
 鳥雪  
 匝満  
 兼水  
 也梁  
 看古  
 種五  
 其令  
 星阜  
 大年  
 一風

批七款三下世四

象もかく鳥れくはたら方の徳名  
 再今到く友の心くハ志はく  
 片破の月裏物うきお方の中  
 今朝の雨をそくハ朝ふ  
 起く草りわおらまはははは  
 休於く曲く梅つらる也  
 面白き枝をほらわおる花  
 因けの春をそくハ春は  
 春うれぬ竹くしてハ春み  
 志けく思ひく草を枯ひをり  
 名をくハ春くは春は

茂竜  
 斗之  
 大阜  
 并二  
 發鬼  
 満子  
 帯梅  
 魯雄  
 庭甫  
 五寅  
 稻城

若狭小網の塩出しを正しく  
 一しるまのわら目ハ移雲茶く  
 田中鶴をきいたは流るるまを  
 送りしりまを阿闍梨を見ま  
 身をしろぬハ一のく、身すき  
 花ぐりのをく、落し風の石  
 ふくらの腕の書を擲出に  
 此寺は扉とつふハ寺りりり  
 脚氣つて、何る乞食の僧  
 いろくの泣程よせ、月と雪  
 あり名河とちりり、鳴り

逸少 雨滴 士朗 卧央 百國 彪門 万岱 蕃涉 昆明 少如 素元

批七款三下款五

松風の鳥中平も進をれハ  
 縹のよとれを濯く折く  
 只人とちりり、火も焚御もり  
 唯あそき粟乃木の下  
 松の子、かしく、みおりせ、て  
 中、休と東を、唯と、集り  
 筆のまの、水、ゆり、と、流るこ  
 眼、つ、つ、乃、母、の、う、と、ま、く  
 け、ま、な、く、も、車、破、れ、り、雲、の、春  
 塘、ま、な、く、も、水、の、高、低  
 ぬ、ま、く、も、の、ま、く、も、海、節、く、ひ、ま

死城 李谷 素外 閻毛 徐英 圃曉 岱青 岳輅 南陽 雨曉 寸長

名のよき見ゆめなる柿をよそそ  
わりくる起ゆらう嘆出は西東  
やまのの蝶のむらうのねんや  
ふらふらのうねえんは成果て  
あうしそまきい金華をいし  
ひさくゆき暮ま錦たる舟の蠟  
色羽ハ涼き浜をりりり  
昼根暮し書ハ蝶しきまら  
外のをうきもはうのきを思ひ  
ぬきし起筆をそそもら松松  
風は浪くろ海山への沈

閑里  
九鳥  
扇里  
也梁  
烏雪  
斗之  
茂竜  
古常  
大阜  
魯雄  
葭兜

批七款二下冊六

あふふりと古き小社をいしり  
何うのうみりやふれそある  
白榛乃門の内すて這のひて  
さる根の秋かかたぬる五寅  
稲は下の路は出くろさるの月  
今をいしりやそそを刈し  
金槌むはは鼻へち号を賣製  
柴焚々ふりけ本の戸はみ也  
歎冬乃枝ハ淋しき雨蛙  
ねれいあるる岩のこ  
此あうり始ふりたる大ハ雄

桐城  
帯梅  
逸少  
五寅  
雨滴  
庭甫  
和士朗  
沂風  
大阜  
彪門  
素外

何はたよむ風のうけろよ  
花鳥乃考も昔は鳥是き  
南守もふ柳海とりなり

少如  
羅城  
岱青

衣身乃乃沙を教ますよのふりを師の病  
床よかりはき最たりと痛く病のひる  
ある日その教乃ふれくは来れ事占て  
卵やさし示し強りて後きこそんころハ  
吾た乃乃強心むさひ留りり汝玉子  
ゆれとり富ひざる屏やとて浮のゆ  
坊たよりをさすの強よす事す川前

批七教二下世七

月の始のよあひ教りり言 始  
か 舞こころを心よとて舞りてとて  
いひあきねのよあひも大も悦ん  
あへる中よまき月の廿一日師の  
命下強りを告あり惣お返りた  
悲しころは沙すく胸せまりて  
忽教の鴨の時に我を家はなれ

沙言のあつら  
ふきる巻  
田史

拾香

吾世日蝶多さつも静也 万岱  
 たりふ極の事いぬまのあひ 羅城  
 鳴鳥のささのむはの花むす 岡毛  
 夢の目もかくをうり立帳分 岱青  
 世をいそむ物り小山様 岳輅  
 今涅槃余も子をくくく天宮にけ 少如  
 蝶鳥もかくそ比ふは法法が 五周  
 有き詔の名は程言一揚ひらり 鳥雪  
 撞くけく今ハ淋き押とぬぬ 松入  
 暮歳秋侍のこに廿日月 沙漠

批七款二下廿八

此み世のうけあふ去て夢のあ 魯雄  
 いしくあそくあま金ぬまのま 徐弟  
 めそくく世を満くりまのま 満子  
 有きたそは世のまをぬまの月 逸少  
 山にハ暮りまあそくくあめや 茂竜  
 暮柳をかひあきけの廿日か 稻城  
 陽をさやあめくも分きわらぬ 昆明  
 梅のあま泪濯あま外夕を 計之  
 物るひあまハア返ぬも夕か 吉甫  
 師の病中うき世の居の  
 心を唱あそくも物りいりて

たえくまあえくまを花はれ  
 を脱く浮世のみちの奥ふじ  
 角落く麻も雪なり神のふゆ  
 雲い雲のふゆを雲のあふ  
 降くつらふらふ淋一花一すゆ  
 とれや世極るもはるも手向子  
 ちうくなく強ふも清く春の水  
 ぬきりくく不矯まのせ業りか  
 ちとちよき多三草苗極るな  
 くれの木の折くすへる手くたふ  
 ちれいさうりとさうりしを  
 楚谷 大年 吳井 元鳥 去前 雨曉 桃李 石里 閑里 沂風 寸長

柳七歌二千廿九

雪降く山もたふりる素い  
 法の不意事もむれきふれ  
 ちるのちをすくは解く神意も  
 梅か糸の牙も志もほよ火日月  
 雪を好くも志はく神も止るも  
 目もろくも地もさうたり維子の  
 八月のうけよりくれく晴り  
 せぬうめの糸も目のねもひ  
 ち所の月入くは糸の糸雨か  
 を編くもへる付くれ一糸の上  
 守昇 守昇 李谷 嵐桂 駿十 青峰 閑虎 古常 五寅 雨滴 南陽 巨川

世ま春のそく大本秋の夕日あり  
うんえおて物うぬまと成りぬ

秋磨 采乙

嗚呼りぬく師と家と幸は乃  
むつや雑と信と肝の室ふと平も  
西曲とひ平のふと師も中し  
うをりつと二人とのよく志すり  
浜をり牙まりり好いて由耳よまきく  
と成るひ口よのむとるをりし  
たと思ひの月よ月よやまをりてぬ

批七終二下四十一

世満

世満

かけろあの際よあけり香部  
秋のそくおとふおまのくれ雲  
ついで花様のまを福し好ひて  
外郎のうさかうのうよ月まてわも  
とる一粒を好ておまの今ば  
うとみと成ぬ  
手向うや室家うのよまうて  
款はうんもより月もあまの智  
嗚呼とてハハハハ極の陰を  
止ぬ人よ室の園も

桂五 星草 庭甫 物裁 桂二



北阿叟者多好之嵐山を賞し

あふ

きつはひい花子花もむあふ山

蛸角

さるくくり人情をふいぬるむま

尔遷

ちまきいそを鳥ハ海りりあて本

桂裏

初七日 枇杷園無り

士朗

梅柳又々もくやき由あふ

白圖

くあままふまのーくあふ

岱青

楫柄を扇り方又押むけて

岡毛

蒲園のみを又ぬくたり

羅城

批七款二下上

批七款二下上

豆實のまを名 蛸角鳴る

卧央

右一頃下略以下同之

同日也 桑凌舎具り

紀鳳

をくれくひ惜といひ 喜の雪

彪門

あふ梅のちらと句ふ神のうま

沙漠

あふりともあふり 月

昆明

梓つむむ秋と有り 暮茶

少如

二七日 桂葉下具り

月もあふくくあふ 激り喜のを

白圖

風も雨もなき茶の上は 露  
頬白馬車よ 雨ぬ 露を  
琵琶の帯の破き 衣くら  
四角の糸 結うき 結の月  
をるし 舟はるく 水のすけり  
遠く 舟の野 髪を 揺る  
同日 灌園 無り  
月も 影も 功実の 目を ぬき  
愕然 出づ 紅梅の くれ 垣  
海の 雲 果 取 ぎ 少 雪 舞 下  
心ゆく 心ゆく 考り あり あり

岱青  
士明  
素外  
闇毛  
卧央  
桂五  
駮六  
満子  
岳格  
少如

批七款三下平二

養子 ひとり 養子 一人 離家  
火も 雨の 二 赤く 雲 雨 出 人

庭甫  
羅城

三七日 銀 後 ち 無り

う かの 木の 芽 無 影 中 調 ず 心  
もの なる けり とき 春 柳 の 陰  
蝨 けり 紙 摺 始 ら ぬ 糸 張  
隣 へ も の を 問 たり あり  
月 を ね けり 雨 ち ち 磨 の 雨  
三 けり 蜜 柑 ち ち ち 奇 奇  
杖 ち ち ち ち ち ち ち ち ち

素外  
少如  
臥央  
素兄  
雨滴  
巨川  
白岡

四七日 寂靜庵無り

羅城

何ぞもぬあふまの舟あは

白岡

梅もりあふまの舟あは

宮毛

きのふ来し燕古巣は白出

岳格

汐浜も海へあふの

岱青

旅人をむくへ入る家多し

万岱

同日 素兄亭無り

仲の船たより又版指をうり

日やうひしてかかたき

版章魚なを

批七款二下四十三

ゆきか 漢 音もなまき

五周

角落一麻の額を控り

駝亦

色の黄くく云有るひや

素外

二日月の夕をくまき

卧央

同日 春日居無り

魁門

三東

あうくやまの石のそ

沙漠

柳のそれををむ

紀鳳

際名のうけ返わりく

吉甫

船の山のうをよくそ

士朗

西のあやのあはく

長明

五七日 一勾井 無り

桂五

あさかりと名をいふる月  
と名をいふくちやありの名  
若しくは滝のしる玉粒をひき  
車に通るさちばらりす家  
草袴の腰にさすは押まうり  
代衣の入りぬりこめり

臥央  
白國  
岱青  
桂裏  
言毛

同日 鴉巢 無り

徐英

あちりくはよ公のおほひうか  
さひりさゆる月のくられ  
二日月の月と暁をおくけ

士朗  
亞滿

批七歌下四

人よらさきと身あるる  
あきも二春あつと任の表  
幾間越へはあるわろきれ

羅城  
万岱  
少如

六七日 岱青亭 無り

岱青

俳諧乃泣のむらや雪月花  
化佛困達のうき花はの春  
春の名水よき春をさうはん  
氣をねいさふ人をみよ出る  
すらくとさかりのも悪小社  
牛の歩の夕ぐれ

桂五  
岳務  
少如  
士朗

同日 十字庵其り

圃曉

名香のさしやそも世なき歌  
まきの霧みふきのまやわ  
戸出をやくまを田おのあと先は  
片れ衣の神のちひさき  
三日月の陽より起る秋の雲  
袖くほそく船舟のすらく  
敷河もこたけはまゆとき鴨の歌  
伊うーろく出る家すむる  
晩鐘のりねまゆへもなき也  
風をき風のさゆ歌かうは

臥夾 素外 凡鳥 雨曉 寸長 閑里 五周 沂凡 巨川

栴七效三西五

あけりゆはほましくも嵐の雲  
二羽たせりあくる冬山の夕ま

扇里

七く日 五周亭其り

士門

研まをよまろ狭の小溪よ

法師

縁ゆきくともおもひ出

時子

小海は魂りよふらん暮の雲

五周

名をきき真の目は花の雨

白図

枝をきき老木の葉を摘んで

臥夾

日今ねらそくも戸をさくぬ也

士朗

名月のさおろを懐く空の立

物裁

秋まけ衣飛るかほねる

素外

庭浦

庭浦

百箇日 暮雨巷無り

白園

後をよきたたりけり今朝の詠ら

岱青

百日をよらけり外の花の雨陰

臥央

下枝をよらけり家を解り出さ

大阜

人さぬくくの夕つを月 羨

間毛

春乃月をねぬきけり情掛

岳輅

はふ蘇の二葉の葉あわらや

士朗

はふしくと雀の宿のゆきをぬ

徐英

衣のやふきけり情掛

昆明

牋七巻二面六

十二流 なるかこえに

沙漠

馬は附けり海橋を別あし

李谷

急折たぬる人のまらりや

素外

明くふか月阿下りの杖の月

五周

常のうらめをめぐる水音

大年

焚つけけり思ひつらき葉棘

紀風

胸の結はほほをいそむる

万岱

まきまき紅の花お井は咲出や

桂五

まきまき雪よ丁のけや

物裁

牋七巻二面六

四十と世の昔、及喬舎子舎しみと生れ  
 きのふ、夜宿亭よ阿そふ遠くハ晴の  
 名の秀て、花雨は名跡をわくむぬハ  
 六十一字予ハ古稀よとわらふおきりや  
 ハと世の難題ハくくハや花の散ハと  
 いふよおむひのけむ旧知己をいふ思ふ  
 老の吾儕ハおまけき有き強親ハ多  
 ころあささるゝ又起りハ夢をま向新事  
 ありわあし

危をくハ睦月ハあつた書成 逸筆坊

批七拾二下四七

名出ルく 阿々而系の鬼ト  
 名を知らぬや我徒をきあふ  
 天を各あり多し野鳴子  
 名は東風ハああハ  
 吹送れ

名雀ハふ果ハなれハ必ひが  
 雲の種ハおせぬハあふ  
 名花ハおぼろハいハ  
 名子ハおの知ハあハ  
 雲の上ハ名を掲げハ  
 名れちりハあふハ

豊山 大魚 士峯 冬和 玉席

知多社

月入き夕よしむ梅の白ひは  
 去りてこの種子梅のしつくりか  
 おりくつ勝をいよる諸君子は  
 梅ありくちあり母あり百子あり  
 同ふ事なき事ハハハハハハハ  
 おくるもくもく月ありありは  
 かりり今ハハハハハハハ  
 わたしきき月を雲の片きりか  
 去りの林ハハハハハハハハハ  
 うえくも願免とあらをハハハハ  
 ねん人もハハハハハハハハハ

并士  
 黙鳥

大阜

批七級二下六

東の海其伴の目をとけは  
 梅ありき中後ハ月なき朝ハハハ  
 外さくハハハハハハハハハハハ  
 木も花原ハハハハハハハハハハハ  
 子の日ハハハハハハハハハハハハハ  
 春の風ちりくちなき日の梅ハハハ  
 月くれハハハハハハハハハハハハハ  
 梅もれ梅もよてハハハハハハハハハ  
 多もなく消ちハハハハハハハハハハハ  
 去りての花みく泪ハハハハハハハハハ  
 誰とあをうとすハハハハハハハハハハハ

梅梅  
 聰美  
 發兔  
 北橋  
 兆如  
 也果  
 台冲  
 芳酬  
 渡鵲  
 葭涼  
 以息



花ありそ名の端 雲と成りたり  
梅散る梢より白ひつれ  
花の依風情を忘る小胡蝶  
丁より序をく雪の名抄外  
あり際ハ河の蒼となき梅影  
花のよそよそ木笠をりふひつ  
極をく梅のうけの序りか  
こり梅さき世のたまた春の雲  
情やれそちりや樹の梅のよ  
月西に入ると東南の人の眼を勝  
梅を散る香もなき春を散る

如泉 魯朝 井水 壺仙 里友 仙風 竜洞 吾水 子く女 十久有 且有

拙七歌二下四十九

新まけの春の心なるきく口外  
か解ききくくくくくくくく  
うさの雲消しやとやねるる片  
梅散る梢に多る春の流し散ぬ  
月よ花よ雪ハ消るるれははは  
星を散る月をきく春の春と散ぬ  
序入る梅く白ふも向うか  
陽春のむく清りも散るるり  
淡雪乃暫時を向となりまら  
うらひもさめり花は散る

木人 佐屋仙兒 之楓 梅具 梅具 巴江 安之 茶汁 風止 善田新田 百鬼

竹田新田

青霞

啟甫

吾翁はゆるく種もま向ふ  
善の傳散は花のあこりか  
人をさへあつ一面のむらりけ

宗通物故の御南社舟ハ觸櫂の輝もて哀悼の  
句をも指さす本意なくさしゆるく二草競ひて  
此知身百ヶ日は成るれハ今もさへ已く退慕乃  
必ひ子の入異魂ようたくゆりぬ

社中  
木吾

梅虎

仙布

たより強く百日たぢぬを根子  
ほくまは国くよとく百日日  
郭はなるとはなるとも西のくぢ

批七幼二下事

笹室

免石

亀六

たぐれ世を故の痕よ志のさし  
古人志すよ流傳も百合ま善のしめ  
能くしり世をさあふゆくの真

いふ年の冬曉甚まふ師よ在るしや  
手病も臥々終る良業終ありと起  
旧のこく成ゆる恨みを中さ海りく  
書立外社よ善て嘉をのへま里まあふ  
少くくはうけくひくくを辞  
ゆりくはま短冊の善もかまうぬ  
福はあやしく三屏くま入る洛陽の

文つらひまらりて嘆憂陸月廿日、三日  
在人の難入ぬる事を告終るとして  
抑もるる免裁はしくねとて取落しぬ  
杖折きてとれは  
清秋公

善言 芬出略

喜阿くくをれき書のとあれ

素里

正月梅もあより夢を告事か

七川キ 逸漢

雲あきくまうまうよ山紅葉を

信州イナ 伯光

静芸の坊方をくく西のて

自徳

批七款二下五

さのきく雲を憂ふをくくくく  
暮ふまの梅ありたりか香松山  
陽とくく外く陰母の女日の子  
暁の力やうりけふく外く  
わやうう前梅亭は装くもりて  
其侍はは後とて

素葉

遠可明

耕水

うけし山やうくくくく  
雪解くくあくくくく香炉峯  
そゆをぬむんくくぬあくく  
さりとくくくくく梅むじ  
かすくくくくくくハ梅月

三州イナ 素

周勢

子近

亀候

仙李

梅ありそ 寝ずきふわとゆ先  
 几鴻  
 梅みきハいやくちうちうちきり  
 賈爰  
 ふあこー雪乃山人寝あり  
 圃来  
 すこきまふ子まま路のま  
 素洲  
 年の良夜の吟をさひ出て  
 今秋ひり端

あふりしとをれしはよ香の月  
 魚日  
 ま川 揺うらうも初夜な  
 卓池  
 家ころ曉たをし寝あ  
 桃生  
 師の物語をひて同社圃  
 初七日拾香

枕七款二下五二

香の煙七尺はまにわらふ也  
 趙息

追悼之俳諧  
 奥州仙臺社中  
 まなうらもてもてぬを  
 大芝坊  
 まももてててその  
 万寸  
 岩ももてはよ羅やぬすん  
 雄淵  
 わちらむ人のみかあり  
 北風  
 唯あまきぬやまき戸の車鳴る  
 渭原  
 わりけり日ハ何もきてわ  
 桑弘  
 南くとねん人を海の何らわ  
 冬湖  
 蒲田の風よ多るもつと  
 風至  
 途るともねゆものを終の地  
 丙舎

冷風よくあくるむ那智の信原  
 六甲  
 子卯く後きハ枕をくふなり  
 風射  
 白ふ結のささたる  
 巾大  
 東海よくみそひの舞子影を言  
 雷后  
 予情くくくあの子を  
 局明  
 我圃の方とるりよんを運り  
 杜嵐  
 赤子残がハなきくぬ火  
 北固  
 夕子まゆくく沙う波あこはは  
 猿眉  
 面ハ小降く種うくく入  
 管士  
 鬼子のハ楠湯の草よ脱種く  
 曾外  
 月の在園子喜ちくくり  
 伴序

批七致ラ下五三

す寶具方のねらりし花の影ハ扇  
 南平  
 持止む鐘の裏くくくく  
 岡毛  
 一置の八日ハも拵ぢく  
 完山  
 寶くくへのまのりなり  
 雀鴨  
 糸くくく糸くくく糸くくく  
 執  
 月  
 社  
 右百頁 一頃下略  
 雲うはくひふふをくくく  
 万寸  
 吾乃のけいねんハおそく女目  
 渭原  
 かくくくくくくくくく  
 凡射  
 折中くの致けハ喜のわくく  
 北風  
 梅の月暮子みくくをくくく

分字

かろくしてはふ月子のほろもとの書の手紙 南平

とせうとこれの修ふじきのおつ

とゆりく旅より鏡の存を今只洛陽

大雲蘭若より一筆の塊をうらふ事

うき

喘く息尔耳を杖の影の動くのこ 御斗菰 菓居

一周忌

寛政四年正月廿日曉臺上人うを路へ

郊四糸坊多尔大雲院よりふわり

其處は葬りゆりやまことけしれのお

古けり澄の洞仙寺に父母の墓取也

紙七款二五西

そらうとこれの大人乃名印ひとのを瘞も

かゝぬのこの塚を築き追慕の記念と

なすゆりく去るの事やを営みゆり日

かゆりま申は却て縁きあらとてり

ゆり久業のしありりり何れとて

すきゆりく今年のおふむりり

其塚は宿を居るのし生ひ苦む

まゆりくあつて文字あつては

去るの春塚築く業ゆり日より

移あつたはかゝりりりり

たるりりりりりりりりり

々々律也乃人といふはわかきられたまふ  
よかきとよなきをうけおひり

身よとやき者や

士朗

徳のきの露

一を勢乃と云事一日よりも  
程速也今既先師むろりの  
大徳養俗の徳教をいづくも  
ゆるは地をいづくは他わくもや  
風羅一字の漢誦是をいづく報恩と云

批七級下五五

真如門前の法ありき

白圓

是をいづく法の事

社友のまゝ先承すむるの暮雨巻乃  
十喜秋を守るは秋うらふも中阿叟  
一周乃忌を孝家止れ朽葉を拂ひ  
採る舞搦書しむる人に依る言の

まゝの言す

妻は月あり

卧央

草をいづくはせむ

跋

涕淚慟哭農甸古禮也安得  
免之落梅也以不蓋落梅花是  
其時意亦哀也也者鄙  
言信然亦何以何之矣也  
也也

羅城記

寬政五年夏五月

門人臥央揖

批七納二下五十六



